蓮如信仰の一考察 (三)

阿部法夫

筆者は先に、真宗門徒の蓮如に対する思慕あるいは崇敬といった感情の表現である二つの「レンニョサン」を概観したところであるが、今回も引き続き庶民側すなわち門徒側よ

り見た蓮如信仰について考えてみたい。

四、穴馬における順村

吉崎を一つの起点とした二つの「レンニョサン」ほど広範囲にわたって巡行するわけではないが、蓮如の御影＝絵像が各地を回るという点で同じような行事が、もう少し行くとすぐに岐阜県に入るという福井県の奥地である穴馬という土地において実施されていたのであった。

先の「レンニョサン」では、その随行記録をもとに述べたところだが、今回は先行する諸文献をベースに筆者なりにまとめてみようと思う。

この年中行事に関する研究については、すでに千葉乗隆氏が「越前の穴馬同行」において紹介されている。[2] この論文に導びかれて、筆者なりの蓮如信仰についての論を進め始めることができたものである。ここに特記して謝意を表したい。

これより先になるが、重松明久氏も「真宗習俗と真宗史」という論文の中で、

こんにちなお蓮如の絵像を廻村している

と簡潔に述べられている。[3]

さらに最近では、坪内晋氏がその著において、廃村による規模の縮少、すなわち巡回地区数の減少を報告されている。[4]

穴馬の順村に関する調査報告は、その他多くの研究がなされたことと思われるが、看見の限り以上三点に過ぎない。順村の起源は何時なのか、また、古い時代の実態はどうであったのかなど、より深く他の地域の真宗習俗と比較しながら史料的に詳しく探ったものはなかったといってよい。ただ、穴馬の地はそのほとんどが水没してしまい、調査が遅きに失した感があったという点では、研究が少ないこともうなずけるものがある。

また、「順村」という用語は千葉乗隆氏が使われたものである。筆者も一応これに従ったところである。その他、「廻村」・「ご巡回」などの使用例がみられるが、術語として一定していないようである。調査研究した者が少ないことが一つの原因であろうが、限定された狭い地域だけのあまり有名でない行事のためでもあろう。

さて、この穴馬の地で巡回している蓮如御影はミノ・笠・杖そして種々の仏具類を携えて一ケ月毎に順送りされていく。その点は、蓮如信仰の要素を考察する上で大変興味深いものがある。この事は後に触れることとして、まず、穴馬という土地柄を押えておく必要があろう。

穴馬という地域は、古くは越前国に属しており、大野郡穴馬郷と呼ばれていた。現在の行政区域では、福井県和泉村と岐阜県白鳥町石徹白の地を指している。

穴馬における真宗をながめた場合、次のような特色を持っている。教団のあり方において全国的にも稀なる原初的形態を保持してきた点である。具体的には、中世の農村社会に真宗が浸透していった当時の様相、すなわち近世に入って次々と寺院化する以前の道場の姿を今に伝えているのである。村民はこの道場を中心とした世俗的生活と宗教的生活（この場合、真宗一色であることが珍しい）との一致したパターンを永く温存してきた。例えば、穴馬九ケ同行（本願寺派をその中心とする）あるいは六ケ同行・八ケ同行（大谷派で構成されている）と称される講集団は、単

に真宗信者の集団に止まらず、その集落の有力者＝各道場役とその他の村民という構図の元に、地域社会と密着した〝宗教的村落運命共同体〟としての機能を中古以来永く保存してきたわけである。しかし、この穴馬も九頭竜ダム建設という運命のいたずらによって、そのほとんどが水没してしまい、残存部落の古い真宗習俗も次々に消滅していった。[5]

福井・岐阜の両県にまたがって巡回していた蓮如御影は「蓮如さま」と尊称されていたようだ。先述の二つの「レンニョサン」と比較すると、近より難い一面を持つことは否定できない。しかし、例えば「蓮如上人御影」として寺の奥深くに掲げ、崇拝し奉るよりは少しく親近感が漂うとひいき目で見てしまうのは筆者のみだろうか。

「蓮如上人」と歴代法主の一員すなわち真宗の善知識様として崇める時と、「レンニョサン」あるいは「蓮如さま」と身近かな者として親近感を抱かせる時とで、蓮如という人物は相反する姿を見せる。蓮如は教学的にも歴史学的にも民俗学的にもとてもおもしろい存在であるといえる。

さて、穴馬の「蓮如さま」は、西本願寺直参門徒で構成する九ケ同行の九部落が一ケ月交替で巡回奉安するものであった。興正寺派の道場へも回っている。この順村について、現代の座談会での記録ではあるが、穴馬同行の各道場役は次のように語っている。[6]なお、この記録の一部は千葉乗隆氏もまとめられていることをお断りしておく。

○越前の方から云いますと、いまは上秋生がありませんから、伊勢・久沢・大谷・荷暮・下半原の順で行き、美濃へ移って為真・大間見・上神路へ行って、今度は折りかえすのです。ですから、越前側の伊勢と美濃の上神路は、二ケ月おいておくことになります。

おまわりになるのは蓮如さまの御影だけじゃないんですよ。ミノ・笠・杖におブクさまといっています蓮如さまにお給仕する道具もです。画像に比べてこういう道具類は新しいものですけれど、昔からありましたね。

○美濃の方にも昔は道場があったのですよ。ですから、この蓮如さまのお迎えも道場を継持しておった当時と同じシキタリでやっています。為真は中・東・西に分かれていまして、毎年交替で道場の維持やら、お世話をさして頂いていた。その関係で、蓮如さまのお迎えはこの通り交替でやるんです。北陸側では、蓮如さまは道場へお迎えするんですが、美濃の為真の方では、当番にあたっている地区の誰かの家を決めておいて、そこへお迎えする。お迎えするとお講さんをやるのですよ。三合盛りといいましてね、一人前のごはんが大体米三合、大きなお椀の上へお仏飯のように高く高く盛り上げて振舞います。参ってきた人は食べきれないで、家へもって帰ります。

興正寺派の道場も、興正寺派では御文章をあげますから、蓮如さまをお迎えするのです。

○蓮如さまは番々を決めて次の道場まで持っていくのですが、ちょうど笈のように、箱に入っていて、背中に負っていける。ミノは被って持っていくのです。すると、先の道場で大勢の人が出迎えて下さるわけで、

道場と道場の間は一里半ぐらいから二里半程度ですから、平常はさほど難儀ではありません。一人で充分です。

ところが、冬になりますとこれは大変なことで、例えば為真と下半原の県境を越すのはほんとうに難中至難です。この県境の油坂を越して蓮如さまをお送りする時は、三・四人の屈強な若者が一日がかりです。この油坂峠というのは、文字通り油を流したような塩梅です。そこで、手足にカンジキをはめて、よつんばいになって急坂をよじのぼる。

これらの発言を通して、順村の巡回順やその実態など、ある程度までの古い形の真宗習俗をうかがい知ることができる。

「レンニョサン」の実態と比べてみると、一ケ所当りの滞留が一ケ月であることから、その間に行なわれる仏事も様々なものがあったであろう。一方、「レンニョサン」のお立寄りでは、数分から数十分と短かいので、読経・焼香・説教というパターンを繰り返すに止まるものであった。

また、最初の人が語っていたが、蓮如の画像や仏具類を笈に入れてこれを背負い、ミノ・笠を被り杖を持った姿には、蓮如の関東巡化時や北陸行化時の姿を髣髴とさせるものがあることは注目してよいだろう。「蓮如さま」を迎える人々にとって御影等を運んでくる人は、となりの集落の人であって比較的身近かな存在として受け入れられたであろう。その心のかたすみでは、蓮如さまが今なお巡って来村した如く感じられ、さらに蓮如その人に会えたのだという喜びに浸ったことであろうことは想像にかたくない。このような法悦の情景は、先の二つの「レンニョサン」においてもお立寄所・宿泊所の各所で見い出されたものであった。

これを民俗学的に見た場合、真宗という排他的だと極言されるほどに純粋に信仰の世界に生きているはずの宗教集団においても、なお日本人の民俗信仰に見られる来訪神・異神歓待の意識が根強く残っていると見るわけである。このような指摘は、故五来重氏・故佐々木孝正氏を始めとした真宗を通して仏教民俗学を究明する先輩諸氏の研究成果による所大である。力不足で曲解していないかといささか不安は残るところであるが、大筋はとらえているつもりである。

そうした中で筆者の立場は次のようなものである。すなわち、蓮如信仰というキーワードで越前ひいては福井県における真宗習俗の実態を掘り起こしていこうとするものである。さらに、越前真宗史を蓮如信仰というフィルターでとらえ直せないかというものである。この立場は、とりもなおさず、筆者の蓮如という人物に対する思い入れ＝蓮如信仰として読者諸氏の目に写るかも知れない。その点は否定はしないが、このような視点からの越前真宗史へのアプローチは比較的少ないと思えるため、あえて筆者の立脚地を示したところである。

さて、穴馬の順村の起源について考えてみよう。この順村の主役である蓮如御影についてある道場役は、

この画像の裏書があるのを見て、教如とあったように記憶していますが、[7]

と座談会で語っているが、それは九ケ同行の始源の伝承との錯誤かと思われる。

実際にはこの御影は西本願寺広如が嘉永元年（一八四八）七月に下附したものである。千葉乗隆氏の調査によれば、蓮如の御影には次のような裏書があったということである。[8]ただし、これ以前に蓮如の御影が下附されて順村していた可能性を否定するものではない。

釈広如（花押）
嘉永元戊申年七月六日
本願寺蓮如画像　興正寺門徒美濃国
郡上郡越前国大野郡
両国堺山中惣道場物

この裏書により「興正寺門徒」である「山中惣道場」へ下附されたものと分かる。この文面からすると、当時九ケ同行は直参として認められていなかったことになる。[9]すなわち興正寺を手次として間接的に西本願寺に属する形となっていたのである。

なお、嘉永元年当時興正寺は脇門跡、一門筆頭として特別な地位にあったが、いまだ西本願寺に所属させられていた。興正寺派として独立できたのは、これより約三〇年後の明治九年（一八七六）の事であった。[10]

史料の裏付けが現在のところないので、穴馬の各道場の間を巡るようになったのは「レンニョサン」と比較して相当時代が下るとしかいえない。蓮如その人の来住という地の利を生かした「レンニョサン」の起源より一世紀近く出遅れているわけである。その理由として、穴馬という地が奥越という辺地であったことや、蓮如という信仰面でのシンボルがなかったことが大きな要因となろう。

後に触れることとなろうが、穴馬九ケ同行が西本願寺での報恩講勤行の中で僧分以外で調声をとるという大変名誉な地位にあることから見て、東西分派の頃からの伝統ではないだろうかと想像できるところである。しかし、順村の起源については蓮如御影裏書の書かれた年代より始められたものとしておく。

さて、「蓮如さま」が各道場や決められた家に迎えられた時、特別に在所の他の家にも奉安されることがある。この現象について考察する前に再び道場役の話を聞いてみよう。[11]

○蓮如さまは道場か役の者の所だけをおまわりになるのではなく、普通の民家にもお迎えします。たとえば、大間見にお越しになっている時、村の者で先祖の回忌や法事を勤めようということになって、特別に蓮如さまをその家にお迎えする。むろん、なんでもかんでも蓮如さまご招待というわけにはいきません。

これは、ご先祖の大切な法事・法要があった場合にのみその家に特別に蓮如御影をお迎えするという臨時的処置であるが、「蓮如さま」が穴馬の村民とりわけ九ケ同行にとって特別大事なもの、安易には使用できないものとして意識されていたことになるのではないだろうか。

その考え方で大谷派の「レンニョサン」関係の史料をながめると、興味深いものが出てきた。それは、安政二年（一八五五）六月に本山より「レンニョサン」の御影を模写した「蓮如上人御影」が富山県の城端別院へ下附されている（「上壇間日記」）が、その願書には、

当御坊之儀者　信証院（蓮如）様御開基之儀ニ御

座候間、何卒等身之御影此度頂戴仕度一同之懇願ニ御座候、尤御例少之御事ニ而不容易之儀とハ存候得共、格別之御慈悲を以蒙御免申度偏奉願上候、万一等身之御影被成御免御儀ニ候得ハ、年々吉崎に御下向之御影御写被成下候間頂戴仕度奉願上候、……[12]

と記されている。すなわち、城端別院は蓮如ゆかりの寺であるので、蓮如「等身之御影」を頂戴したい。前例がないとは思うが「一同之懇願」であるので、格別の御配慮をお願いしたい。万が一、頂戴できるのなら「年々吉崎に御下向」になる御影をいただきたい、という文面である。ここで注目したいのは「一同之懇願」の部分である。

城端別院の門徒たちは、かねがね吉崎へ参詣する度に蓮如忌の隆盛を目のあたりにしていたので、我々にも吉崎へ毎年下向する蓮如御影と同じものを信仰のシンボルとしてほしいとしたものであろう。門徒にあっては、蓮如の「等身之御影」が自分たちの所にもなければならないとする感情の表れであり、いかに大切なものであったかを物語るものである。わざわざ遠い吉崎の地まで蓮如の絵像を参拝しにいかなくてもよく、近い所で拝める利便さは、蓮如に対する思い入れとともに模写となったといえるのではないだろうか。蓮如御影の模写は、生きた蓮如に身近かな場所で会えることになる。御文（章）の説教を聞き、蓮如の生きるが如き教えを聞くよりは、御影の方がより具体的に蓮如を身近に感じられたことであろう。

これは、蓮如が「絵像ヨリハ名号ト言フナリ」[13]としているにもかかわらず、他流と同じく「名号ヨリハ絵像、絵像ヨリハ木像」を信仰の対象としてきたことに通ずる。近世にあってもその方が理解され易く、宗教的感銘を覚え易かったのかも知れない。

城端の地にしろ、穴馬の地にしろ蓮如御影に対する考え方は真宗門徒である限り時代を越えて同一であると思えるのである。蓮如を大切に思い、その御影＝絵像を大切に取扱うのである。

さらに、穴馬において先に如く臨時的にしろ蓮如の御影を仏壇の近くにお迎えするという習俗は、最近蒲池勢至氏が説かれる「オソーブツ」という真宗習俗に相通ずるものがあるとみてよいだろう。

全国的に調査された蒲池氏によれば、「オソーブツ」とは、葬式に当って寺院より本尊を借りてきて、終ると返しにいくという〝動座習俗〟、あるいはその絵像・本尊そのものを指すものであるが、もう一つの別な形態は、単にその本尊が門徒の間を巡回する〝巡行習俗〟を持つものも含めている。なお、ここでいう絵像・本尊とは、阿弥陀仏の絵像＝「方便法身尊像」がほとんどである。「オソーブツ」は近世期に入って暫時寺院化していく以前の道場、それも〝惣道場〟の元本尊であった例が多いという。惣道場へ下附された「方便法身尊像」は、後世寺へと伝来するものと門徒側へ払い下げられるものとに分かれる。前者は〝動座習俗〟を持つに至り、後者については〝巡行習俗〟を有するようになる。[14]

後者のパターン・性格が穴馬においては蓮如御影すなわち「蓮如さま」にも引きずられて表出されたものと考えられそうである。ただし、「オソーブツ（お惣仏・お総仏）」のほとんどが葬式儀礼に当って阿弥陀仏の尊像が動いていることから、穴馬の順村という習

俗が「オソーブツ」的性格を持つと断言するのは早計かも知れない。いささか性格は異なるといわねばならないであろう。

しかし、阿弥陀仏の尊像が親鸞あるいは蓮如の絵像に、さらにその後の本願寺歴代法主の絵像に変化したとしても、門徒側にとっては同じ本山からの下附物であったから同様の効果を生み出してきたと仮定すれば、「蓮如さま」が「オソーブツ」であろうということも首肯できるのではないだろうか。

ちなみに、西山郷史氏は最近の著書において「五斗如来」と称される本願寺前住上人の絵像が葬儀および年忌に当って貸し出されたり、さらに親鸞・蓮如の画像が出る場合もあると報告しているが、[15]西山氏の研究フィールドである石川県鹿島郡あたりの真宗篤信の地帯にこのような習俗が残されてきたという事実は、同じ真宗に育てられてきた北陸の他の地域のものとして、筆者の仮定を強く裏付けてくれるものである。

また、穴馬六ケ・八ケ同行の間をかって確実に巡っていたであろう「客仏様」[16]と呼ばれた親鸞・蓮如・顕如・教如などの各画像たちも「オソーブツ」的性格、特に〝巡行習俗〟の性格を示しているといってよいだろう。

「蓮如さま」の順村が永く続けられることによって、個別的に閉鎖されてきた穴馬の各部落の住民の信仰生活の面だけに止まらず、山村生活全般にわたる横の連帯感がますます強固になっていき、引いては、穴馬地域における真宗信仰の純粋化・高揚化がより推進されていったであろうことは容易に想像できるところである。

この順村という年中行事も九頭竜ダム建設に伴なう水没部落の廃村・移転によって永らく細々と続けられてきたが、最近（昭和六三年）になって「蓮如上人の〝御影像ご巡回〟三三年ぶりに復活」したとの記事[17]に接した。往年の九ケ村巡回という形に戻ることは不可能ではあるが、古くから伝わってきた伝統行事や真宗習俗が少しでも復興していき、後世へ伝えられていくことは大変喜ばしい限りである。

注

(1)拙稿「蓮如信仰の一考察」(一)・(二)、『若越郷土研究』34の4・5　平成元年。

(2)千葉乗隆著『中部山村社会の真宗』所収　同書一六四～一六五頁。昭和四六年。

(3)福井県教育委員会編『穴馬の民俗』所収　同書一〇五頁。昭和四一年。

(4)坪内晋著『白山山麓の真宗発展と道場の研究』五二頁。昭和六〇年。

なお、その部分は次の通りである。引用して巡回地域の変遷を確認しておこう。

……九ケ講の蓮如画像は近年穴馬六区（下伊勢・久沢・大谷・荷暮・下半原及び上秋生（但し旧西谷村））が水没のため、岐阜県郡上郡の大間見・河辺・神路の三区と、犬山の興正寺別院の四ケ所を五ケ月交替で巡廻していた。尚、白鳥町の為真は旧穴馬よりの移住者だけが加入していた。

(5)この項、注(2)～(4)の諸書の他に『和泉村史』(昭和五二年)・『ふるさと和泉』(昭和五三年)なども参考にした。

(6)穴馬同行座談会における記事。

『中外日報』　昭和三七年一月一九日付。

(7)注(6)に同じ。

(8)千葉氏前掲書　一六五頁。

(9)穴馬九ケ同行の直参化問題は本願寺の東西分派の頃よりくすぶり続けており、興正寺や福井県三国の勝授寺などの寺次権を主張る寺々と九ケ同行との間

の争論も再三再四にわたって行われたようである。そうした事情は『中部山村社会の真宗』・『穴馬の民俗』などに詳説されているので参照されたい。

(10)『真宗新辞典』一四九頁。

(11)穴馬同行座談会の記事。

『中外日報』　昭和三七年一月二三日付。

(12)東本願寺宗学院編修部編『東本願寺史料』三城端御坊蓮如上人御影願の項。同書二一四頁。

(13)蓮如は次のように言っている。

他流ニハ、名号ヨリハ木像ト云ナリ。当流ニハ、木像ヨリハ絵像、絵像ヨリハ名号ト云ナリ。

『蓮如上人一語記（実悟旧記）』・『蓮如上人仰条々』などに見える。

『真宗史料集成』第二巻　四四四・四七五頁より。

(14)蒲池勢至著『真宗と民俗信仰』八六～一〇七頁。平成五年。

(15)西山郷史著『蓮如と真宗行事』一四三～一四四頁。一九九〇（平成二年）。

なお、西山氏の紹介する「五斗如来」という習俗を「オソーブツ」の一事例として蒲池氏は見ている。これは、順村もまた「オソーブツ」であるという可能性を示すものとしてよいだろう。

(16)「いずみ村の伝説と民話」（『ふるさと和泉』の一分冊）九四頁。

その他、注(2)～(4)の諸書においても、「客仏」・「惣仏」として、順村あるいは巡回していることを報告している。

なお、大谷派の六ケ同行・八ケ同行の歴史に関しては、これらの諸書で詳説されているので、「オソーブツ」との関連性を指摘するに止め、本稿において詳しくは触れないでおく。

(17)『福井新聞』昭和六三年八月一六日付。

ここでちょっと気になる事があるので述べておく。それは〝三三年ぶり〟という表現である。新聞記事の表現を信ずれば、昭和三〇年頃には途絶えていたことになり、千葉氏・重松氏・坪内氏の調査・報告と異なることになってしまう。昭和六〇年の調査でも巡回地は違ってはいるものの綿々と続けられてきていたのである。一般に新聞記事はセンセーショナルな標題で読者の目を引くことは周知のことではあるが、三三年ぶりに復活したというのは蓮如御影が美濃から越前へ渡ってきたことを指すのである。巡回という行事が復活したものではないということである。